



## 一方（一かた）

---

とある公園のベンチに、おじさん二人が座っていた。このおじさんたち、さっきまでは赤の他人だったが、ただ同い年というだけで意気投合して、今このベンチで二人、星空を眺めている。

あの、教えて欲しいんだけど。とおじさんAが言う。

なに？とおじさんBが言う。

おじさんAはここから、人生悩み相談を始めるので、覚悟してほしい。

おじさんA「生きる方法ってやつをさ、知りたいんだ」

おじさんB「生きる方法？」

A「そう。」

B「ったって、もうこの年まで生きてるじゃないの。俺が逐一教えなくたって、あんたもう、生きてる  
じゃないの」

A「そうなんだけどさ。この年になっても、改めて思うのさ。生きていくのはなんて大変なんだろうって」

B「まあ、悩みを話せよ」

A「悩みってほどのことじゃないんだ。たださ、毎日時間に追われて、一つやることを終えたら、また一つ、いや、二つか三つくらいやることが増えてさ。ようやく半端な時間ができて、よし、好きなことをやろうと思っても、何をしても気分が晴れなくて、息苦しくてしょうがないんだ」

B「ほう...そうか」

A「なあ、生き方ってやつを教えてくれよ」

B「俺がそんなの知ってると思うのか？」

A「いや、だめもとで」

B「知ってるさ」

A「知ってるのか？いや一、今日はいい人に出会った」

B「よく食べて、よく寝て、酸素をいっぱい吸うことだ」

A「あら、すごく簡単に言うね。光合成みたいに」

B「そう。光合成と同じよ。花みたいに何日か咲いたら、枯ればばいい。何の責任もないのよ」

A「はあ一、そういうもんかね」

B「そういうもんよ。考えてもみれ。宇宙から見たら、人間なんて花みたいなもんよ」

A「きれいに見えるのかね」

B「さあ、それはどうか知らんがね。きれいってというのは植え付けられた概念で...」

A「なんだか簡単じゃなくなってきたな」

B「そう。だからあまり深く考えないこった。さあ、いっぱい寝るために帰ろう」

A「そうだな。ああ、そうだった。駅までの行き方教えてくれよ」

B「あ、ここからまっすぐ行けば駅だよ。あんた、どこから来たの？駅から来たんじゃないの？」

A「確かに駅からは来たんだけども、知らない駅で適当に降りて、何も考えずにぶらぶら歩いてた

んだ。そしたら、ここに辿り着いたってわけだから、あまり何も知らないの」

B「あはあはあは」

A「変な笑い方」

B「あんたね、俺に聞かなくても、生き方わかってるじゃないの」

A「そうかい」

B「ああ、いい人に出会った今日は。じゃあ、また。良い酸素、いっぱい吸うんだよ！」

A「良い酸素ってなんだよ。じゃあ、おやすみ」

そう言って二人のおじさんは、永遠の別れをしたのでした。

おわ

り

【2016-07-16】指さし小説 第4話

今回のテーマは、「一方（一かた）」でした。初めて名詞ではなかったの  
で、ちょっとびびりましたが、例文では、「作り方」なんてのも出ていて、色々  
作れそうだな、と思い直し、よし、「生き方」にしよう決めました。おじさん  
二人、なんだかいいですね。

<http://p.booklog.jp/book/108396>

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108396>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108396>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ